

郷土かわらばん

流山にある不思議な地名

地名という漢字二字以上が一般的ですが、流山には、漢字一字の地名が多く存在します。今号では、中央図書館や博物館がある「加」の地域について調べていきます。

古くは「加村」といいました。このことは『本土寺過去帳』にも表記されています。

本土寺は、松戸市平賀にあり、建治三（一二七七）年に日蓮の弟子日郎が創建した寺です。寺に伝わる『本土寺過去帳』とは、室町時代から江戸時代前期にかけて書き継がれたもので、亡くなった人の法名や命日、その時々起きた出来事などが記されています。平賀のことばかりではなく、その周辺の出来事や地名も記載されています。「加村」は永享九（一四三七）年の記述に登場します。

「加村」の由来

「加わった村」からの「加村」

「加村」の由来については諸説あり、大正九（一九二〇）年発行の『流山町誌』に「この地を開拓した岩田氏の子孫が八木村に入ろうとしたが、認められなかったので加村と名づけた。八木に加わるという意味である。」と記されています。

「桑村」からの「加村」

古代の流山は下総国葛飾郡に属していました。

平安時代に編まれた漢和辞典である『和名類聚抄』には全国の郡郷名が記されており、葛飾郡の郷として、度毛（とも）、八島（やしま）、新居（にい）、桑原（くわはら）、栗原（くりはら）、豊島（としま）、余戸（あまるべ）、駅家

森の図書館
X
@N_mori
noto



発行
流山市立
森の図書館
指定管理者
株式会社
すばる

（うまや）の八つが記されています。日本の歴史

地理学者である吉田東伍は、自身が編纂した『大日本地名辞書』のなかで、この「桑原郷」に注目し、「桑原」が「桑村」に転じ、「加村」となったのではないかと考察しています。

飛地山 加村屋敷

江戸時代、加村は駿河国田中藩本多家の領地でした。

加村には「飛地山（とびちやま）」という江戸川に向かって突き出た部分があります。東西を横断する道で二つに分かれていて、「坂の台」と呼ばれる北側には、中央図書館や博物館、住宅があり、南側には流山市役所庁舎などが建っています。

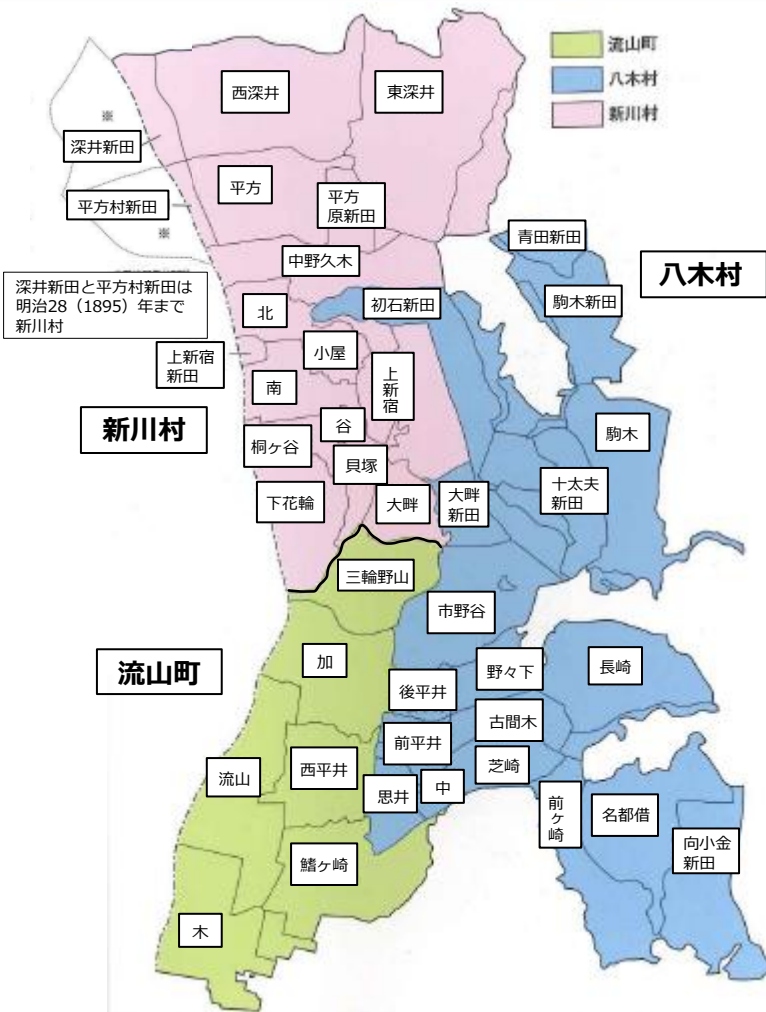
文久三（一八六三）年、坂の台には本多家の屋敷が建設され、藩邸から藩士らが移住しました。

この移住は幕府の通達によるもので、参勤交代の

緩和や、大名妻子の帰国許可とともに、江戸藩邸の藩士を減らしてもよいとしました。そのため、帰国する者と下総に移転させる者に分け、移転する者のために建てられたのが加村・坂の台の屋敷です。

加村屋敷は明治六（一八七三）年、千葉県が成立して県庁が千葉町に移るまで、葛飾県や印旛県の庁舎として利用されました。

『流山の地名を歩く』 27ページ図「流山町・八木村・新川村」に加筆



市制町村制による町村合併

明治二二（一八八九）年、市制町村制が公布され、全国的に町村合併が行われました。その結果、全国の町村数は約五分の一に減少しました。この動きは「明治の大合併」と呼ばれています。千葉県では約二五〇あった町村数が、三五〇余りにまで激減しました。現在の流山市の範囲には、明治二二（一八八九）年四月に流山町・八木村・新川村の一町二村が成立しました。それぞれの町村に組み込まれた旧村は、一律に

「村」の字を削って新しい町村の「大字（おおあざ）」という単位になりました。

流山町は、流山・加・三輪

野山・西平井・鰭ヶ崎・木の

六の旧村を合併して成立し、

旧村中で流山村が最大かつ有名という理由で町名に採用されました。これにより、

「加」は流山町の大字の一つとなりました。

【参考文献】

- 『中世の流山を探索 附 流山市内板碑集成 流山市立博物館調査研究報告書26』 流山市立博物館 流山市教育委員会 2009年
 - 『東葛流山研究第30号 楽しい東葛地名辞典』 流山市立博物館友の会 斎書房 2012年
 - 『流山の地名を歩く 流山市立博物館調査研究報告書29』 流山市立博物館 2014年
 - 『チエック！ 流山のむかし』 流山市立博物館 流山市教育委員会 2016年
 - 『ふるさと流山のあゆみ』第2版 流山市立博物館 流山市教育委員会 2018年
- いずれも流山市立図書館の所蔵資料です。
協力：流山市立博物館

流山町	流山・加・三輪野山・西平井・鰭ヶ崎・木
八木村	思井・中・芝崎・古間木・前平井・後平井・市野谷・野々下・長崎・名都借・前ヶ崎・向小金新田・駒木・駒木新田・青田新田・十太夫新田・初石新田・大畔新田
新川村	深井新田・西深井・東深井・平方・平方村新田・平方原新田・中野久木・北・小屋・上新宿・上新宿新田・南・上貝塚・桐ヶ谷・谷・大畔・下花輪